



TITLE:

弘治本西廂記について

AUTHOR(S):

土屋, 育子

---

CITATION:

土屋, 育子. 弘治本西廂記について. 中國文學報 2004, 68: 97-120

ISSUE DATE:

2004-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177943>

RIGHT:

## 弘治本西廂記について

土 屋 育 子

京都府立南陽高等学校

### はじめに

本稿で取り上げる『西廂記』は、元雜劇を代表する傑作の一つである。北方の音樂北曲を用いる雜劇の芝居であることから『北西廂』、或いは作者が王實甫と言われていることから『王西廂』とも呼ばれている。現在見える形になったのは元末明初と考えられているが、成立當初のテキストの形態については議論が多い。その原因の一つは、『西廂記』成立當初の版本は残っておらず、完全な形で現存する最も古い版本が、明代中期、弘治十一年に出版された所謂弘治本であるからであろう。また、『西廂記』のテキストは萬曆年間以降に大量に刊刻され、現存するテキストも

かなりの數にのほることから、各テキスト間の影響關係を明らかにすること自體が、きわめて難しい問題であることもあるであろう。

先行する『西廂記』版本研究について振り返ってみよう。

『西廂記』版本研究として初期に成されたのが、田中謙二博士の研究<sup>①</sup>である。博士は、現存最古の完全な『西廂記』版本である弘治本について、本文に誤りが多いことを指摘した上で、その價値を低くみておられる。しかし、何故弘治本に誤りが多いのかという點については言及しておられない。

傳田章氏<sup>③</sup>は、萬曆版西廂記の版本を、第一群（余瀟東本など）、第二群（三槐堂刻本など）、第三群（天章閣本など）に分け、第一群は場上系、第二、三群は案頭系とされる。弘治本は、第二群・第三群とともに坊刻通行本の流れに位置づけられる。第一群の場上系は、案頭系とは流れが異なるとした上で、「刊刻は弘治本よりはるかに後でも、むしろ古いものを傳えて」おり、弘治本より余瀟東本の方が古い形である可能性が高いとされる。

田仲一成博士の一連の版本研究では、「明初以來の原本北西廂記が明中葉を挟んでいかなる流傳と分化を圖ったか」という點を明らかにしておられる。「最善のテキスト」探しにとらわれることなく、テキストの本文そのものを校勘・検討し、膨大な數のテキストの系統づけを行ったという點で、非常に劃期的な研究である。博士は『西廂記』テキストの流傳を次のように説明される。Ⅰ群（碧筠齋本・余瀟東本）から、Ⅱ群（閩本系（三槐堂本など）へと受け繼がれ、Ⅲ群（弋陽腔系散齣集など）の二方向に分化したとされる。Ⅳ群（弋陽腔系散齣集など）の二方向に分化したとされる。弘治本についてはⅠ群とⅡ群の中間であるⅠ群の位置を與え、弘治本の價値を認めながらも、余瀟東本などのほうがより古い要素を残し、重要であると考えておられるようである。<sup>⑤</sup>

このように、先行研究において、弘治本は現存最古のテキストであるにもかかわらずあまり重要視されることがなかった。しかし筆者は、弘治本がどのようなテキストであるのか、再度検討を行う必要があるのではないかと考える。そのためには、詳細で廣範なテキストの校勘を行うことが

必要となるが、『西廂記』の場合、曲辭・臺詞の増減だけで古い形態のテキストを見極めることは難しい。また、テキストの眉批・校語に見える「古本」を現存するテキストと比較する方法も、當時の知識人たちが認識していた「古本」を明らかにすることはできるが、その「古本」ないしは「古本」に近いテキストが實際の古いテキストであったとは限らないであろう。本稿では、現存最古のテキストである弘治本を中心として、諸テキストと校勘を行い、『西廂記』の諸テキスト間の異同を明らかにするとともに、先行作品である『董解元西廂記諸宮調』（以下『董西廂』）との比較、そして、先行研究ではあまり意識されてこなかった弘治本における體裁の分析などを試みてみたい。

## 一 テキスト

校勘に使用した版本は次の通りである。

### Ⅰ 『西廂記』テキスト<sup>⑥</sup>

① 弘治本 『奇妙全相註釋西廂記』五卷（各卷四折、卷

二のみ五折) 弘治戊午(十一年 一四九八年) 金臺岳家  
重刊 刊記の欄外に「正陽門(筆者注: 北京の前門) ○  
大街東下小石□第一巷内岳家○移諸書書坊○是(○)一  
本來有るべき文字を缺く」とあり、北京で刊行された  
もの。…〔弘〕

② 余瀟東本 『重刻元本題評音釋西廂記』二卷 余瀟  
東校 萬曆間 福建劉龍田刊本…〔余〕

③ 凌濛初本 『西廂記』五本 天啓刊 凌濛初批點朱  
墨套印本…〔凌〕

④ 容與堂本 『李卓吾先生批評北西廂記』二卷 李贄  
評 萬曆三十八年(一六一〇) 款書 容與堂刊本…

〔容〕

⑤ 王驥德本 『新校古本西廂記』五卷 王驥德校注  
萬曆四十二年(一六一四) 序…〔王〕

⑥ 何璧校本 『北西廂記』二卷 何璧校 萬曆四十四  
年(一六一六) 序…〔何〕

⑦ 張深之本 『張深之先生正北西廂祕本』五卷 張深  
之校 崇禎十二年(一六三九) 序…〔張〕

弘治本西廂記について(土屋)

⑧ 天章閣本 『李卓吾先生批點西廂記眞本』二卷 李  
贄評 崇禎十三年(一六四〇) 序 西陵天章閣刊本…

〔天〕

⑨ 汲古閣六十種曲本 『六十種曲』所收「北西廂記」  
崇禎間 汲古閣刊本…〔汲〕

⑩ 神田本 『北西廂記』刊刻年不明 神田喜一郎氏藏  
…〔神〕

⑪ 風月錦囊 『新刊摘匯奇妙戲式全家錦囊北西廂』徐  
文昭編輯 嘉靖三十二年(一五五三) 詹氏進賢堂重刊  
本。『西廂記』の節略本を收録。スペイン・エスコリ  
アル圖書館藏

## II 改編版北西廂記

⑫ 槃邁碩人本 『詞壇清玩 槃邁碩人増改定本(西廂  
記)』二卷 明槃邁碩人増改 天啓元年(一六二二) 序  
刊本 北京圖書館藏

## III 『董西廂』テキスト

⑬ 『古本董解元西廂記』(董解元西廂記諸宮調<sup>⑭</sup>) 八卷  
明燕山松溪逸人校 嘉靖三十六年(一五五七) 序刊本

上海圖書館藏

『西廂記』版本の先行研究においては、明代文人の見方が參考にされてきた。古本とされるテキストについては、王驥德（字伯良、號方諸生、會稽人）『新校注古本西廂記』（萬曆四十二年（一六一四）序）や凌濛初『西廂記五本』（天啓年間刊）及び槃邁碩人本における記述が重視された。これらのテキストで「古本」または「筠本」と引用され、最も古形を傳えるテキストとして重視されているのが、碧筠齋本（嘉靖二十二年（一五四三）刊。王本の凡例による）である。碧筠齋本は、おそらく明代文人の間で『西廂記』の古本であると考えられ、知識人の關與が強いテキストには少なからぬ影響力を持っていたと思われる。碧筠齋本自体はすでに現存しないが、槃邁碩人本の眉欄に碧筠齋本の特徵を示す校語が記され、斷片的にはあるが碧筠齋本の本文をうかがい知ることが出来る。とはいえ、明代の認識が正しいとも限らないであろう。やはり、弘治本を中心とした再検討が必要であると考ええる。

二 『董西廂』との關係

これまで輕視されてきた弘治本には、古い要素は全くないのであろうか。そこで、先行する『董西廂』との比較を試みたい。『西廂記』が『董西廂』に依據しているということについては、すでに指摘がある。しかし、『西廂記』のいずれのテキストがより『董西廂』に近い關係にあるのかについては言及されていない。ここでは、弘治本を中心にすえながら、あわせて余瀟東本と凌濛初本についても注目したい。

まず、弘治本の卷五第一折（以下5—1のように記す）  
【醋葫蘆】曲の後にある次の箇所を見てみたい。鶯鶯が張生及第の手紙と詩を讀んだ後のくだりである。

例1：弘治本5—1 【醋葫蘆】曲の後

〔弘〕旦喜不自勝。探花郎是第三名。

（旦は喜びにたえません。探花郎は第三位の成績です）  
各テキストでは次の通りである。

〔余〕（鶯）慚愧。探花郎早是第三名也呵。

(鶯鶯せりふ：ありがたいこと。探花郎は第三位の成績だわ。)

〔容〕・〔何〕・〔天〕(鶯云) 慚愧也。探花郎は第三名。

〔王〕・〔凌〕 存在せず

諸本が明らかに臺詞であるのに對して、弘治本は地の文あるいは第三者的な語り口である。『董西廂』卷七を見てみると果たして「鶯解詩旨曰：探花郎、第三也。」というように類似した表現が見える。「旦喜不自勝」に當たるものはないのだが、例えば卷三「生喜不自勝」、卷五「生啓門觀。喜不自勝」や、同「張生遂展開。讀了鶯鶯詩。喜不自勝」と見え、『董西廂』ではよく使われる表現である。また、次の例も見えてみよう。

例2：弘治本1—3 (はじめ)

〔弘〕(末上云) ……詩曰 閑尋丈室高僧語、悶對西廂

皓月吟。

【鬪鶯鶯】(生唱) 玉宇無塵、銀河瀉影。…(四曲略)

【小桃紅】のあと

(末…念詩曰) 月色溶溶夜、花陰寂寂春。如何臨皓

弘治本西廂記について(土屋)

魄、不見月中人。

(諸本は、脚色を「生」とする以外は、弘治本に一致)

〔余〕(生上云) ……正是、人間良夜靜不靜、天上美人

來不來。

【越調鬪鶯鶯】(生唱) 玉宇無塵、銀河瀉影。…(四

曲略。【小桃紅】のあと)

(生云) 呀、好明月。(余本のみここに【么】曲が入る

が略)

月色溶溶夜、花陰寂寂春。如何臨皓魄、

不見月中人。

〔凌〕(末上云) ……正是、閑尋方丈高僧語、悶對西廂

皓月吟。

【越調鬪鶯鶯】 玉宇無塵、銀河瀉影。…(四曲略)

【小桃紅】のあと)

月色溶溶夜、花陰寂寂春。如何臨

皓魄、不見月中人。

〔容〕(生上云) ……×× 閑尋丈室高僧語、悶對西廂

皓月吟。

【鬪鶴鵲】（生唱）玉宇無塵、銀河瀉露。…（四曲略）

【小桃紅】のあと

月色溶溶夜、花陰寂寂春。如何

臨皓魄、不見月中人。

〔王〕（生上云）

……×× 閑尋丈室高僧語、悶對西廂皓月吟。（生唱）

【越調鬪鶴鵲】玉宇無塵、銀河瀉露。…（四曲略）

【小桃紅】のあと

（念詩曰）月色溶溶夜、花陰寂寂春。如何

臨皓魄、不見月中人。

この部分は『董西廂』卷五の次の部分にもとづくとと思われる。

【尾】是夜玉宇無塵。銀河瀉露。月華鋪地。愈增詩

客之吟。花氣薰人。欲破禪僧之定。

人間良夜靜復靜。天上美人來不來。

傍線部に注目すると、余瀟東本のほうが『董西廂』に近く、弘治本・凌濛初本は改編されているように見える。しかし、『董西廂』卷一に次のような箇所がある。

【尾】……閑尋丈室高僧語。悶對西廂皓月吟。是夜月

色如晝。生至鶯庭側近。口占二十字小詩一絕。其詩曰。

月色溶溶夜。花陰寂寂春。如何臨皓魄。不見月中人。

（卷一に類似する箇所には點線を、卷五に類似する箇所には傍線を付す）

所には傍線を付す）

弘治本1—3は張生が鶯鶯の姿を初めて目にする場面、  
『董西廂』では卷一が對應する。『董西廂』卷一の引用部分と、『董西廂』卷五「玉宇無塵。銀河瀉露」とは、ともに張生と鶯鶯が出會う場面ということでは共通する。『西廂記』では、『董西廂』の詩句を異なる場面に使う傾向が見られることがすでに指摘されており、ここでは『董西廂』卷一だけではなく、『董西廂』卷五の兩方の曲辭を利用したのであろう。また余瀟東本の引用箇所に見える「人間良夜靜不靜、天上美人來不來」の句は、實は弘治本と他のテキストでは『董西廂』卷五に對應する箇所（弘治本4—1【端正好】曲後）に見えており、余瀟東本だけが他のテキストと異なっている。つまり、この箇所においては、余瀟東本のみ書き換えが行われている可能性が高いといえよ

う。

『西廂記』の諸テキスト全般に共通する事柄として、いずれも『董西廂』に近い部分を持ちながらも、すでに様々な改訂の手が入れられており、そのためいづれを古いと見るべきかの判断を下すのは難しい。しかしこのようにしてみると、弘治本と比較して、余瀟東本、凌濛初本などのほうが、改訂のあとがより顯著に見られるように思われる。これは弘治本の古さを示唆しているのではないだろうか。

### 三 弘治本の體裁

現存最古の版本弘治本は、戦後になって発見されたテキストであるが、前述したように今日に至るまでその存在價值に注目した研究は少ない。弘治本が輕視されるに至ったのは、諸本とは異なる「誤り」——不合理な折分け、役割名（脚色）の不統一、登退場を示すト書きの「上・下」を隨處に缺くこと——が見られることによる。<sup>⑮</sup>一方、例えば、古い部分を残すといわれる余瀟東本には、弘治本のような「誤り」はみられない。弘治本のこのような「誤り」は、

一體何を示しているのだろうか。

弘治本は、比較的大判の本で、各葉の上半分に精緻な挿繪が付けられている。このことは比較的上流の階層向けに作られた書物であることを推測させる。弘治本の刊語では、弘治本が營利目的の出版物であることが述べられており、弘治本が、明代後期に現れる王驥德本や蔡孟碩人本といった文人が關與しているテキストと性格を異にする點は、確認しておくべきであろう。

#### （一）不合理な折分け

それでは、弘治本の形式を詳しく見ていくことにしよう。『西廂記』は雜劇の代表作と言われながら、實は雜劇としては異例の形式をとっている。雜劇は一般的に四折構成をとるが、弘治本は異例の全五卷二十一折（卷二のみ五折）という體裁をとる。各卷が雜劇一つ分に相當し、五つの雜劇で一つの話を構成している。ところが、この構成について、弘治本の折分けは妥當性を缺くことがすでに先行研究で指摘されている。以下にその箇所を示してみよう（數字



は卷一折を表す。以下同じ。

2—2 諸本はここで折分けせず、弘治本第一折と第二折をひとつにまとめ、第一折とする。凌本は第一折最後の夫人の白から第二折にあたる部分を楔子とする。<sup>16</sup>

2—3 「夫人上云」から折を分ける。(弘治本以外のテキストでは余瀟東本が同じ箇所て折分けをする。その他のテキストでは直後の「夫人云：今日安排下小酌」から折を分ける。)

2—4 諸本は第三折末尾「夫人排卓子上云」から折を分けるが、弘治本はその後の【雙調五供養】から第四折とする。實際は夫人の白から旦の唱にかけては連續しているで、諸本のように折分けするのが妥當。

2—5 弘治本は紅の白から分ける。諸本はその後の張生の白から。

3—3 弘治本は旦が七言二句の韻文を唱えるところから。諸本は第二折末尾の紅の白で折を分ける。

5—4 弘治本は「生騎馬上云」から。凌濤初本、王驥德本はその前の夫人の白からとする。何璧校本には夫

人の白がない。

さらに、弘治本の卷一第一折末尾、卷二第一折末尾に、本来、各巻頭が巻末に置かれるべきはずの題目正名が記され、未整理の段階のテキストであることをうかがわせる。

このような不合理な折分けのために、これを弘治本の杜撰な點として、その價值を下げる見方もある。<sup>17</sup>しかし、なぜこのようになっていたのかを考えてみるべきであろう。

弘治本がもとにしたテキストには、もともと折分けがなかったと思われる形跡がある。

一つは、弘治本の本文に挿入されている釋義(語句の意味を説明したもの)である。弘治本においては、釋義が既出或いは別の場所にある場合には、その該當箇所を記しているのだが、その記載方法に問題がある。例えば、卷三第一折九十四葉bには「偷香故事、詳見第一折【耍孩兒】【五煞】下」と記されているが、「偷香」についての釋義は、實際には卷一第二折【耍孩兒】【五煞】に見えている。つまり、釋義の「第一折」というのは、「卷一」を指していると思われる。「卷」にあたる各部分は「折」という名稱

が付けられていたのであろう。また、卷二第五折の冒頭に見える釋義「刺股」「懸梁」は、卷二第四折末尾の七言二句に見える語句である。後折の中に前折の釋義が含まれていることは、折分けをした際に生じた混亂と考えられ、それぞれの「折」の中には折分けはなかったのであろう。

二つめには、弘治本の刊行に先立つテキストと弘治本の關係である。一九八〇年に北京中國書店藏『文獻通考』の紙背から四葉の西廂記殘本が発見された。この西廂記殘本は、版式、字體から成化年間に刊行されたものであるといわれている。<sup>18</sup>『中國大百科全書 戲曲曲藝』に、その書影がカラー寫真で載せられている。弘治本で言えば、卷一第四折【得勝令】後の白から【鴛鴦煞】「玉人歸去得」までと卷二冒頭三行に該當する部分が殘存する。この殘本と弘治本とを校勘すると、兩者は非常に近い關係にあることがわかる。殘本の卷二冒頭部分には「新編校正西廂記卷之二」とだけとあって、弘治本に見られる卷頭の四文字の題目と折分けがなく、釋義も付いていないようである。早い時期に成立した雜劇テキスト、例えば『元刊雜劇三十種』、

周憲王雜劇、千小穀本などがそうであるように、本來雜劇において、折分けは必須のものではなかった。推測ではあるが、弘治本での折分けの不合理さは、殘本のような體裁のテキストを祖本として弘治本が成立する際、はじめて折分けが試みられた結果生じたものである可能性が非常に高いと思われる。<sup>19</sup>もしもこの通りであったならば、殘本以外に折分けをしていない『西廂記』テキストは現存するものの中には見られないものの、弘治本は古い形態のテキストの痕跡をとどめていると言えよう。

#### (2) 脚色・ト書き用語の不統一

次に語彙的な面から、弘治本を見てみよう。弘治本においては、脚色（役柄）とト書きの用語の不統一が見られる。脚色名では、例えば、『西廂記』の冒頭では、主人公張生の脚色に「生」と「末」の兩方が使われている。これはもちろん、「生」「末」の脚色の二人の役者が張生を演じているということを示しているのではない。またト書きでは、と白（臺詞）を導く際には「云」と「曰」が、韻文を導く

[表 1]

弘治本 1—4	弘治本	殘本	余本	凌本	容本	王本
【折桂令】後	末云	末云	生云	末云	生云	生云
【錦上花】【幺】後	生曰	生曰	生云	末云	生云	生云
【碧玉簫】後	生云	生云	生云	末云	生云	生云

際には「念」などが使われている。

弘治本に見える脚色と唱・臺詞を導く語の組み合わせのパターンを次に示そう（括弧内は登場人物の名）。

脚色：生・末（張生）、旦（鶯

鶯）、紅（紅娘）、夫人、潔

（長老）、淨（法聰）、惠・潔

（惠明）

唱を導く：生唱 旦唱 紅唱

夫人唱 惠（惠明）唱

「二」で臺詞を導く：末云

生云 旦云 紅云 夫人云

潔云 淨云 外云など

「曰」で臺詞を導く：生曰

夫人曰 將軍曰 惠明曰 紅

曰

このような用語の不統一は、他の

テキストにおいては、明らかに誤字

とわかる例以外ではほとんど見られない。ただし、先に紹介した西廂記殘本と弘治本とで比較をすると、殘本も弘治本と同じような誤りを含んでいることがわかるのである。主要なテキストとともに表にしてみよう。

西廂記殘本の殘存箇所は、弘治本で言えば卷一第四折の末尾で、ちょうど「末云」「生曰」「生云」の三つの表記のパターンがあらわれる箇所である。このように、非常に驚くべきことに、殘本にも弘治本と同様に脚色表記の不統一が見られ、弘治本とすべて一致している。一方、諸テキストでは表記が統一されているのがわかる。このことから、弘治本と殘本とが近い関係にあることがうかがえ、弘治本は古い形態を残していると言えよう。

弘治本とその他のテキストについて、もう少し別の箇所比べてみてみよう。弘治本 2—1【收尾】曲後、惠明（普救寺の僧）が杜確將軍の陣營に着き、張生の手紙を渡す場面のト書きである。

「弘」惠明曰……。將軍曰……。潔打問訊了。潔云……。：

惠遞書與了。將軍拆書念曰……。

〔余〕惠明云…。將軍云…。惠打開訊了。惠云…。…  
惠投書×了。將軍折書念曰…。

〔凌〕惠明云…。將軍云…。惠打開訊了 ×云…。…  
惠投書×了。將軍折書念曰…。

〔容〕惠×云…。將軍云…。惠見將軍科。惠云…。…  
惠遞書×× 將軍××念科。

〔王〕惠×云…。將軍云…。惠打開訊了 ×云…。…  
惠遞書×了。將軍折×念曰…。

弘治本では、惠明の脚色名として「惠」と「潔」が使われ、臺詞を導く語も「云」と「曰」が見え、その上やや不自然なト書き「惠遞書與了」もあり、かなり混乱している。そのほかのテキストでは、明らかな誤りを除いてはおおむね整理されているのと對照的である。「將軍折書念曰」（將軍が手紙を開いて念じていうには）について、容與堂本を除く他のテキストでも多くが「曰」とするのは、通常の臺詞とは異なつて、手紙を読む様子をそれらしく表したかったからなのかもしれない。

このような用語の不統一は、何を示しているのであろう

弘治本西廂記について（土屋）

か。例えば『元曲選』のようにある個人によつて意圖的に整理されたテキストの場合であれば、臺詞を導く語のようなテクニカルチームは「云」にはば統一されている。また、周憲王の原本をもとにしたと標榜する凌濛初本でも、テクニカルチームはおおむね統一されている。つまり、用語の統一が見られるということは、後發のテキストである可能性が高いことを示しているのではないだろうか。凌濛初本はすでに「僞託の書」であるとされているが、その凌濛初本では用語の使用が整理されている點は非常に示唆的であると言える。このように、弘治本は、知識人の意圖的な改變を受けたテキストと同列に見ることはできないと思われる。弘治本に見られる用語の不統一は、戯曲テキストの發展の過渡期に位置するテキストであるためと考えられるであろう。

なお、先に觸れた殘本に見える臺詞「天明了也。請夫人小姐回宅歇息去」の傍線部分は、弘治本には見えず、諸テキストの中では王驥德本だけに見えている。これは王驥德が古いテキストにも注意していた結果であると推測される。<sup>②</sup>

ただし、王驥德本は他の箇所では殘本と一致しない場合もあることから、王驥德本については雜劇における『元曲選』のごとく、知識人による改訂版テキストと見なすのが妥當ではないかと思われる。

(3) ト書き用語の使用状況

それでは、弘治本におけるト書きに使われる語の使用状況を、詳しく見ていくことにしよう(表2)。

臺詞を導く語の「云」と「曰」とが特徴的な分布をしている。「云」がほぼ全編にわたってまんべんなく現れるのに對し、「曰」の現れ方には偏りが見られる。「生曰」(張生の臺詞)が現れる箇所とその數は、卷一第四折に1、卷二第一折に4、同第二折に6、同第三折に17、同第四折に2、卷四第一折と卷五第二折にそれぞれ1つずつである。夫人やそのほかの登場人物の場合でも、「曰」は卷二第一折から第三折にかけて特徴的に現れる。その他の箇所では、主に「詩曰」という形で韻文を導くときに「曰」が用いられている。一方、韻文を導く「念」は卷二第四折から卷四

第四折に集中してみられる。以上の語彙の使用状況から、『西廂記』はおおよそ三つの部分に分けられる。「曰」と「生」が頻出する部分、「念」が現れる部分、際だった特徴が見られない部分である。

「曰」が現れる卷二第一折から第三折には、他の部分と異なる特徴が見られる。全篇にわたって張生の脚色を示す「末」と「生」が混在しているが、この部分に限っては「生」を用いる例が壓倒的に多く、「末」はほとんど見られないのである。なお、他のテキストにおいては、表記の不揃いは誤りの結果として見られる程度で、弘治本のような使用數の偏りは見られない。

『西廂記』の眼目といえは張生と鶯鶯との戀物語であるが、「曰」が頻出する卷二の第一折から第三折は、やや趣の異なる荒々しい戦いの場面である。あらずしは、孫飛虎の反亂軍が普救寺を包圍する。張生が書いた白馬將軍杜確への救援要請の手紙を、普救寺の荒くれ法師惠明が使者となって届け、杜確が駆けつけ孫飛虎を撃退する、というものである。ト書きには、戦闘の仕草を行う旨が書き込まれ

ている。

實はこの箇所には、『西廂記』と『董西廂』との違いも含まれている。この場面に登場する恵明という法師は、實は先行する西廂記の話には見えず、『西廂記』に至って突如登場した人物なのである。『董西廂』においては、杜確將軍に手紙を届ける役割を果たすのは法聰という僧侶であつて、恵明ではない。『董西廂』における法聰は、張生と鶯鶯を結びつける役割の一端も擔うなど、脇役ながら重要な役まわりを與えられている。一方、『西廂記』においても法聰は登場するが、その役割は「變化、かつ後退し」<sup>②</sup>ているとされる。つまり、『西廂記』は『董西廂』の内容を大體受け継いでいるのだが、卷二の部分に限つては顯著な違いがみられるのである。このように、内容面において異質であることと、用語の使用における違いとが重なり合っている點は興味深い。

臺詞を導く場合に「曰」を用いるのは、諸宮調とも共通するスタイルである。諸宮調とは、宋金元代に流行した説唱文學の一種で、同一の調に屬する歌曲を連ねた組曲(套

弘治本西廂記について(土屋)

數)を宮調を變えながら積み重ね、その間に散文の説明を挿入して一つの物語を語るものである。<sup>③</sup>現存する諸宮調のテキストには『董西廂』『劉知遠諸宮調』などがあるが、それらを見ると、『劉知遠諸宮調』の場合は「曰」「道」「言」などが混在し、『董西廂』では「曰」を使う例が非常に多い。「曰」はまた、「詩曰」のように、韻文を導く場合に使われることも少なくない。例えば『董西廂』で韻文が挿入される箇所においては、特に何も示さない場合と、「詩曰」を使う場合(八例)の二つのパターンが見られる。そもそも臺詞を導く語として「曰」を使用する戯曲テキスト自体、實はほかにあまり例を見ない。先の例で挙げたように、弘治本では「將軍曰」とあるのが、余瀟東本・凌本では「將軍云」になっているのは、おそらく不適當と見なされ、訂正されたのであろう。以上のことから、「曰」は本來、諸宮調のような藝能におけるテクニカルタームであつたと推測される。なお、「詩曰」自体は、明代後期におびただしく出版された通俗小説において、韻文を導く際に用いられているが、この場合は、藝能の形態を踏襲しよう

その他	曰の使用数			韻 文		開 場
	生曰	夫人曰	その他	念(韻文)	その他(韻文)	開
			名曰普救寺		旦云7・2 末云7・2	外扮老夫人上開、末扮騎馬引來人上開、淨扮潔郎上開
聰云3			孟子曰 驚…曰			
					末…詩曰7・2 念詩曰5・4 旦和詩曰5・4	正旦上開
	1					
歡云、和尚 叫云了住	4	3			旦詩曰7・2	淨扮孫飛虎上開
	6	4	飛虎曰 將軍曰12 惠明曰2		外…詩曰7・4 將軍…詩曰7・2 將軍望蒲關起發曰7・2	外扮杜將軍引卒子上開、引卒子上開
	17	6	夫人道 長老曰 紅曰2		長老…云5・2 生…又云…5・2 詩曰7・2	
	2	2		生念7・2 生念7・2		
			名曰 (曲名)		旦云5・2	
			末問	紅念7・2 生念7・2	末讀…詩曰5・8	
				生念7・4 生念5・4	末云5・4/末云6・4	
				旦念7・2 生念5・2		
				末念云7・8	紅云7・2	
	1			生念7・2 生念7・4		
歡郎云 來云				旦念7・2 旦念7・2		
僧云				旦念7・2、5・4 末念5・4、5・2	僧(法本)云7・2	夫人長老上開
小二哥 僕云2				生念7・2 7・4	末…詩曰7・2	末引僕騎馬上開
僕云10			紅問曰		旦念書科…詩曰7・2	生引僕人上開、旦引紅娘上開
僕云3	1				生上云7・2 末讀書科…詩曰7・4	
		1	杜將軍上		曰淨云7・2	
杜將軍上云				生念7・2	淨云…7・4 詩曰7・8	

[表2]

弘治本西廂記について(土屋)

		唱				ト書き・臺詞の總數				云の使用數*1																					
卷	折	生	唱	旦	唱	紅	唱	その他	末	生	旦	紅	淨	外	その他	末	云	生	旦	云	紅	云	夫人	云	潔	云	淨	云	外	云	
1	1	11	1					夫人唱	14	1	2	2	9	3		12(1)	1	2								法聰	6	小二哥	1	琴童	1
1	2	17	1	1					32	1	0	11	3	1		31				7					長老	26	法聰	1	長老	1	
1	3	15							9	0	11	7				9			9	7											
1	4	10	1						6	2	3	2				4	1	2	1	2			長老	5							
2	1		13						6	7	6	1		長老1 和尚1			2	5					長老	4	孫飛虎	1					
2	2							惠唱	7		9		1	長老1 張生1 君瑞1			1						長老	5 惠明	3	孫飛虎	1	杜確	1		
2	3	3		13					22	3	3	10				2	3	3	6	2											
2	4	3	12	1					7	6	9	10		夫人	6	5	1	4	8	4											
2	5	2	13						3	1	7	9				3	1	7	8												
3	1			14					16	1	12	31				6			7	14											
3	2		1	19					15	3	12	30				13			8	25											
3	3			13					13	4	9	18				12	1	6	17												
3	4	1		12					14	3	6	21	1	1		11	2	5	18	1		長老	2	大醫	1						
4	1	17		1					12	3	1	9				9	1	8	8												
4	2			4					1	8	21			夫人	16	1		3	17	13											
4	3	2	17	1					10	10	6			夫人	2	6		4	3	4		長老	1								
4	4	11	5						10	4	9		2			7	2	7											1		
5	1	1	11	1					1	12	0	18				1			13	13											
5	2	19							7	3						5	2(1)	1													
5	3			12					1		9	21					1			9	5	長老	1	鄭恒	20(1)						
5	4	11	3	3					11	5	7	6	4	4		9	4	3	6	8		長老	1	鄭恒	3	杜確	4				

\*1 潔・淨・外は場面によって演じる人物が異なるため、該当する人名を記す。



という意識の表れであると考えられる。

韻文を導く語として使用される「念」がよく現れるようになるのは、明代に入ってからではないかと思われる。雜劇の元刊本では「念」の用例はわずかに一例のみ、<sup>24</sup>「詩曰」を使う例は、5例見られる。また『西廂記』の諸テキストの中では、余瀟東本で「念」が多く使われているが、余瀟東本以外のテキストでは「詩曰」や「念」などを何も明示しない場合も多い。弘治本の場合、卷三と卷四に集中的に「念」が使われている。はつきりとわからないが、この部分が同じ時期にまとめられた可能性も考えられるかもしれない。

明初に集められた『永樂大典戲文』<sup>25</sup>において臺詞を導く語に「云」のほか「白」を使う例が見られるように、早い時期のテキストには用語の不統一という現象が普遍的に見られる。こうしてみると、用語が統一されていない弘治本は、それ以前の體裁や内容を比較的多く残していると思われる。

もしもこのことが確かであれば、ト書き用語・内容面で

特徴の見られる弘治本の卷二第一折―第三折は、書き換えが行われ、語りもの・唱いものようなものから新たな内容が導入された箇所である可能性が高いと考えられるかもしれない。弘治本の卷二第一折―第三折には「生」が特徴的に現れるが、脚色名を示すものではなく、『董西廂』と同様、張生の「生」を示していた可能性もあるだろう。

弘治本においては、張生が唱うことを示すト書きとして「生唱」はあっても「末唱」はないという点も注意すべきであろう。これは憶測になってしまうが、『西廂記』の曲辭には早い時期にすでに固定したテキストが存在し、そのテキストでは「生唱」となっていたのかもしれない。唱と白は同時期に成立したのではなく、曲辭については比較的早い時期にすでに固定していた可能性があるだろう。主に臺詞を導く語において表記の混亂が見られるのは、臺詞の固定化はおくれて進行したためと推測できるのではなからうか。

(4) 釋義など

先にも觸れたが、弘治本には語句の釋義が付けられている。他のテキストで同様に釋義が見られるのは、徐士範本（萬曆八年序）・余瀘東本・神田本である。徐士範本の本文は長らく佚して傳わらず、劉世珩『彙刻傳劇』（民國五年一九一六 凌本もあわせて翻刻。暖紅室本と呼ばれる）に翻刻される序文二篇、各齣の題目、そして釋義・字音の部分によつてその一端をうかがい知ることができる。

徐士範本・余瀘東本・神田本の釋義と、弘治本の釋義とは、わずかな例外を除いては、非常に似通つたものである。釋義の項目數も、弘治本の釋義は全部で二九一項目、徐士範本釋義は全部で二七〇項目、このうち弘治本と一致するのは二六九項目である。余瀘東本釋義は全部で二七四項目、そのうち弘治本と一致するのは二六六項目である。神田本釋義は全部で二五四項目、このうち弘治本と一致するのは二二六項目である。このように、釋義の多くが一致しており、何らかの繼承關係があるものと思われる。

弘治本西廂記について（土屋）

具體的に、釋義の部分を弘治本1—1【賞花時】【么】から例を擧げてみよう。

〔弘〕蕭寺 出翰墨全書。梁武帝姓蕭、好佛造佛寺、故云蕭寺。

〔徐〕蕭寺 ××××× 梁武帝姓蕭、好佛造×寺、因名焉。

〔余〕蕭寺 ××××× 梁武帝姓蕭、好佛造×寺、因名焉。

〔神〕蕭寺 ××××× 梁武帝姓蕭、好佛造×寺、因名×。

弘治本では明記されている出典の書名が、徐士範本・余瀘東本・神田本では省略されている。このことから、弘治本の釋義が先行し、徐士範本・余瀘東本・神田本の釋義は弘治本あるいは弘治本系統の釋義をもとにしていると考えられるであらう。

次に、弘治本には付いておらず、徐士範本・余瀘東本・神田本には付けられている字音によつて明らかになることについて見てみたい。弘治本1—1、老夫人が登場した際

の臺詞を見てみよう。

〔弘〕 況兼法本長老、又是俺公、剃度的和尚。

〔余〕 況兼法本長老、又是俺相公剃度的和尚。

〔凌〕 況兼法本長老、又是俺相公剃度的和尚。

〔神〕 況兼法本長老、又是俺公公剃度的和尚。

〔容〕 況兼法本長老、又是俺公公剃度的和尚。

〔王〕 況兼本寺長老法本、又是俺公公剃度的和尚。

弘治本・神田本・容與堂本では、普救寺の住職法本は老夫人のしゅうとが出家させたことになっているが、余瀘東本・凌濛初本では、老夫人の夫がしたことになっている。では次に、弘治本1—2に法本が登場するくだりを見てみよう。

〔弘〕 此寺是則天皇后盖造的。貧僧乃相國崔珏的令尊剃度的。此寺年深崩損。

〔余〕 此寺是則天皇后盖造的、××××××××××××××××××  
×××× ××後來崩損。

〔凌〕 此寺是則天皇后盖造的、××××××××××××××××××  
×××× ××後來崩損。

〔神〕 此寺是則天皇后盖造的。貧僧乃相國崔珏的令尊剃度的。此寺年深崩損。

〔容〕 此寺是則天皇后盖造的。貧僧乃相國崔珏的令尊剃度的。此寺年深崩損。

〔王〕 ××××××××××××××××××××××××××××××××××××  
×××× ××××××××

この法本の自己紹介においても、弘治本・神田本・容與堂本では老夫人の臺詞と對應した内容になっているが、余瀘東本・凌濛初本では法本を出家させた人物を老夫人の夫としているためであろう「貧僧」令尊剃度的」の部分がない。どちらがもとの形なのであろうか。このことを知るために、字音の有無が利用できるのである。

徐士範本・余瀘東本・神田本では、「貧僧乃相國崔珏的令尊剃度的」の「珏」「剃」に字音が付けられているが、余瀘東本には字音に對應する文字が無い。このほか、徐士範本・余瀘東本・神田本の第十五齣の字音「詮」（弘治本4—3【上小樓】曲）は、余瀘東本の本文では「稔」になっている。第十五齣の字音「賡」（同【四邊靜】曲後）も、余瀘

東本の本文には對應する文字が無い。したがって、徐士範本・余瀟東本・神田本の字音は、弘治本系統の本文をもとにして付けられたものであり、そして、余瀟東本の本文は弘治本系統の本文をもとにして書き換えが行われたものであると考えられるであろう。

また、弘治本などに見える「崔珏」というのは崔府君のことである。崔府君は元代において特に盛んに信仰されていた神として知られ、元雜劇の中にもしばしば登場している<sup>②</sup>。しかし、明代に入ってからはその信仰が衰えてしまったことから、明刊本である余瀟東本・凌濛初本・王驥德本では「崔珏」という名は不適當と見なされて削除が行われたものであろう。神田本・容與堂本などでは、特に改めることなくそのまま繼承したものと考えられる。逆に明代に入ってから「崔珏」の名が挿入されたというのは考えにくい。

以上のことから、余瀟東本は弘治本系統の本文をもとにして書き換えが行われたテキストであり、弘治本は他のテキストに先がけて登場したテキストであることになるだ

弘治本西廂記について（土屋）

ろう。

#### 四 余瀟東本の挿入詞

余瀟東本は、先行研究において、最も古い形態を残すテキストの一つとして位置づけられているが、どのようなテキストなのか。弘治本と余瀟東本とを比べた場合、最も顯著な違いは、余瀟東本には弘治本には見えない詞が挿入されている点である。

余瀟東本に見える挿入詞を一覧にして表3に示してみよう（括弧内は弘治本の對應箇所。數字は巻―折を示す）。あわせて『花草粹編』『花間集』『草堂詩餘』における收録の有無も示す。

詞の挿入は十二箇所にのぼり、これだけのまとまった数である以上、個別に挿入されたというのは考えにくい。實はこれらの詞をすべて收録する書物が存在するのである。それが表に挙げた『花草粹編』十二卷（萬曆十一年序刊本）である。余瀟東本の刊刻は萬曆二十年であるので、詞の増補にあたっては『花草粹編』をもとにしたと推定できる。

[表 3]

余本(弘治本)	詞 句(第一句)	出 典	花草粹編	花間集	草堂詩餘
第 5 齣(2-1)	「夢覺金屏依舊空」	韋莊「天仙子」之四	卷一	卷三	×
第 5 齣(2-1)	「惆悵良宵月下期」	韋莊「天仙子」之一	卷一	卷三	×
第 9 齣(3-1)	「紅滿枝、綠滿枝。」	馮延巳「長相思」	卷一	×	×
第10齣(3-2)	「淚花落枕紅棉小」	周邦彥「蝶戀花」	卷七	×	卷二
第16齣(4-4)	「平林漠漠烟如織」	李白「菩薩蠻」	卷三	×	卷一
第16齣(4-4)	「玉慘客愁出鳳城」	聶勝瓊「鷓鴣天」	卷五	×	×
第16齣(4-4)	「綠楊芳草長亭路」	晏殊「玉樓春」	卷六	×	卷一
第16齣(4-4)	「坐對銀鈿空嘆息」	韋莊「木蘭花」	卷六	卷三	×
第17齣(5-1)	「別來半歲音書絕」	韋莊「應天長」之二	卷四	卷一	×
第17齣(5-1)	「野花芳草」	韋莊「清平樂」之二	卷三	卷二	×
第17齣(5-1)	「春愁南陌」	韋莊「清平樂」之一	卷三	卷二	×
第18齣(5-2)	「桃溪不作從容住」	周邦彥「玉樓春」之四	卷六	×	卷一

ただし先行研究によれば、余瀟東本は徐士範本とほぼ同一の本文であるとされ、もしもその通りであれば余瀟東本の本文のほうが『花草粹編』に先行することになる。しかし、先に見たように、釋義が似通う弘治本と余瀟東本が、その本文では異なる部分が多いことを考えると、釋義・字音の一致だけで余瀟東本と徐士範本が同一の本文を有するとすることは留保すべきであろう。

また『花草粹編』は、萬曆十一年以前にその原形が成立していたとされており、時間的に矛盾しない。劉修業氏によれば、現行の『花草粹編』は吳承恩輯『花草新編』を改編したものであるという。實際に陳文燭という人物が吳承恩輯『花草新編』のために記した序が残っており、また上海圖書館に吳承恩輯『花草新編』が藏されている。陳耀文による『花草粹編』の序には、陳耀文は吳承恩らと交友を持ち、彼らの藏書を書き寫して六卷が出来たと、更に増補して全十二卷にして出版を考えたものの、二紀が過ぎてしまった、と記されている。『花草粹編』序は萬曆十一年に書かれているので、二紀前というのは嘉靖三十八年、お

そらくそのころに陳耀文は淮安府に勤務し吳承恩らと交友を持ったのであろうから、吳承恩輯『花草新編』は嘉靖年間には成立していたと考えられるであろう。

以上のことから、余瀟東本が徐士範本と同一の内容であった場合でも、少なくとも挿入詞に限っては、『花草新編』或いは『花草粹編』を種本にして増補した可能性が高いことになる。

また、『花草粹編』は『花間集』『草堂詩餘』を参考に編集された可能性があるが、『花間集』『草堂詩餘』に収録しない詞も収録しており(表3)、余瀟東本に見える詞がもなく収録されているのはやはり『花草粹編』だけである。したがって、余瀟東本は『花草粹編』或いは『花草新編』にもとづいている可能性が高いといえる。以上の推定が正しいければ、余瀟東本は弘治本より新しい要素を含むことになり、古い形態をそのまま傳えているテキストとはいえないことになるであろう。

余瀟東本の挿入詞が『花草粹編』にもとづくことになれば、さらに次に述べるような可能性も生じてくる。改編版

弘治本西廂記について(土屋)

『西廂記』である槃邁碩人本にも、他のテキストにもとづいた旨が校語に明記された詞が四首見える。槃邁碩人本第十七折(余本第十齣、弘治本3―2)「淚花落枕紅棉小」詞の校語は「天欲曉數句(筆者注:「淚花落枕紅棉小」句のこと)、諸本俱無。惟徐文長本有之、今并錄」、槃邁碩人本第二十七折(余本第十七齣、弘治本5―1)「別來半歲音書絕」詞の校語は「別來九句、閩本・俗本俱無。今徐文長本有之。今從之」とあることから、この二つの挿入詞については徐文長本にも見え、余瀟東本は徐文長本と密接な關係を持つことがわかる。また槃邁碩人本第二十七折「野花芳草」・「春愁南陌」の兩詞の校語には、「野花十六句(筆者注:「野花芳草」・「春愁南陌」兩詞のこと、閩本・俗本俱無。今依碧筠齋本用之」とある。「野花芳草」・「春愁南陌」の兩詞が碧筠齋本に由來するのであれば、兩詞を収録する余瀟東本は、明人が古本と考える碧筠齋本とも關係が密接であることになる。しかし、余瀟東本が『花草粹編』にもとづく挿入詞という新しい部分を含んでいるのであれば、碧筠齋本についても余瀟東本と同様に、新しい要素を含むテキス

トである可能性が高いことになるであろう。また、かりに槃邁碩人本の校語が誤りで、「野花芳草」「春愁南陌」の兩詞が碧筠齋本ではなく別のテキストにもとづくものであったとしても、その場合は余瀟東本と古本とされる碧筠齋本とを結びつける積極的な證據を缺くこととなる。このことから、余瀟東本は必ずしも古いテキストであるとは言い切れないことになるう。

# おわりに

冒頭で述べたように、弘治本は刊刻年代が古いものの價値の低いテキストであるとされてきた。しかし、ここまで見てきたように、弘治本は、體裁や表記の不統一、『董西廂』との關係などから、意圖的な改編が加えられていない古い形態を残しているテキストであるということになるであろう。ただ、筆者の目的は、古いテキスト探しをしようというのではない。最終的には、戯曲テキストの發展過程の一端を、『西廂記』をサンプルとして明らかにすることが目的である。例えば雜劇の場合、現存する最古のテキス

トは『元刊雜劇三十種』であり、これはト書き・臺詞が不完全な状態で收録されている。明代の雜劇テキストでは例えば『周憲王雜劇』が、全賓と銘打ってト書き・臺詞を收録するようになり、さらに明代後期の『元曲選』になると知識人の手によって大幅な改編が加えられるという過程をたどっている。『西廂記』の場合でも、同じような過程をたどってきたと考えられるのである。弘治本のようなト書き・臺詞に不完全な部分を残すテキストが諸テキストに先行し、徐々にト書き・臺詞が増補されたテキストが登場し、さらにそれが整理されていったと考えられるのではないだろうか。

このこととは別に、『董西廂』と『西廂記』の關係がこれまで考えられてきた以上に密接であることが、この過程で明らかとなった。両者が類似する箇所はすでに調査済みであるが、これについては稿を改めて論じることとしたい。

## 註

- ① 『田中謙二著作集』第一卷（汲古書院 二〇〇〇年八月

初出(上)『ビブリア』一 一九四九年、(下)『日本中國學會報』二 一九五一年

- ② 注①田中前掲書所收「書評 影弘治刊本『西廂記』五卷／王季思校注『西廂記』／吳曉鈴校註『西廂記』／王季思『從鶯鶯傳到西廂記』」(『田中謙二著作集』第一卷六〇頁以下初出『中國文學報』四 一九五六)

- ③ 傳田章「萬曆版西廂記の系統とその性格」(『東方學』第三十一冊 一九六五)

- ④ 田仲一成博士の『西廂記』版本研究の論文には、次の二つが重要である。『西廂記』版本の全面的な研究としては、「十五・六世紀を中心とする江南地方劇の變質について(五)」の「第四章ノ三 明代江南演劇における『雅・俗』分解の進行(下)」——北劇脚本の分化——(『東洋文化研究所紀要第七十二冊 一九七七』)があり、また、西廂記原本に迫るものとして「明初以來、西廂記の流傳と分化——碧筠齋本を起點としての一考察——」(『伊藤漱平教授退官記念中國學論集』汲古書院 一九八六年)がある。

- ⑤ 注④田仲前掲論文(一九八六)参照。

- ⑥ 西廂記の版本については、傳田章「明刊元雜劇西廂記目錄」(『東京大學東洋文化研究所附屬東洋學文獻センター 一九七〇』)を参照した。この一覽以外に、曲辭のみ收録したテキストで、『雍熙樂府』二十卷(郭勛選輯 嘉靖年間 北京大學圖書館藏)がある。

弘治本西廂記について(土屋)

- ⑦ 注⑥前掲書によれば、余瀟東本には、劉龍田刊本のほか熊峰堂刊本(萬曆二十年)が存するが、「兩者の間にはちがいはほとんどなく、徐士範本(現存せず 萬曆八年刊(彙刻傳劇西廂記考據に引く程巨源の序による))の改訂重刊本である」とされる。

- ⑧ 刊記がないため、刊行年は、卷下卷頭に附される挿繪中の款書「庚戌夏日模于吳山 無瑕」による。注⑥前掲書によれば、「雜劇本文は同じ萬曆三十八年の刊である起鳳館刊本のそれと同じものである」とされる。なお、筆者は京都大學文學部閱覽室藏アメリカ國會圖書館善本叢書を利用した。

- ⑨ 神田喜一郎監修『中國戲曲善本三種 北西廂記・斷髮記・竊符記』(思文閣出版 一九八二)を使用した。

- ⑩ 『風月錦囊』に收録される『西廂記』(節録)との關係については稿を改めて論じるつもりである。

- ⑪ 築瀧碩人については、徐奮鵬という人物であることが、注⑥前掲書六十七頁、また、金文京「湯賓尹與晚明商業出版」(『世變與維新——晚明與晚清的文學藝術』)において指摘されている。

- ⑫ 『董西廂』のテキストとしては、『董解元西廂記諸宮調』研究(汲古書院 一九九八年二月)にもとづいて校勘を加えた。

- ⑬ 注⑫前掲書の解説を参照。

- ⑭ 注⑫前掲書の解説を参照。



- ①⑤ 注②田中前掲論文（注①前掲書 六〇二頁）
- ①⑥ 雜劇の折の概念に關しては、岩城秀夫「元雜劇の構成に關する基礎概念の再檢討」（『中國戲曲演劇研究』創文社 一九七二）を參照。
- ①⑦ 注①前掲書參照。
- ①⑧ 蔣星煜「新發現的最早的『西廂記』殘葉」（『明刊本西廂記研究』中國戲劇出版社 一九八二）
- ①⑨ 弘治本の折分けに關して注①⑥前掲書では、「當時の折そのものに對する考え方が未定着であつたことを示すとともに、折の標示が套數のみを中心となされ、白について十分な注意が拂われなかつたことを示す」（五〇三頁）と論じられているが、弘治本の折分けが整合性を缺く點のみ話題にしておられる。本論は殘本との比較から、弘治本の原本に折分けがなかつた可能性を指摘し、岩城博士の論を補強するものである。
- ②⑩ 田中謙二「『西廂記』版本の研究（下）」（注①前掲書所收）。
- ②⑪ 注④前掲論文において、王本が弘治以前の古本を見ていたことが指摘されている。
- ②⑫ 注⑫前掲書解説を參照。
- ②⑬ 注⑬前掲書解説を參照。
- ②⑭ 元刊本「大都新刊關目的本東窗事犯」第二折冒頭のト書きに、「正末扮采行者、拿火筒、上、念（この後に五、五、五、九の韻文らしき文を唱える）」がある。
- ②⑮ 錢南揚校注『永樂大典戲文三種校注』（中華書局 一九七九）による。
- ②⑯ 蔣星煜「論徐士範本『西廂記』（『明刊本西廂記研究』中國戲劇出版社 一九八五 四十一頁）「直到最近、我對明刊本『西廂記』在國內外所藏狀況作較全面的了解時、在上海圖書館發現了此書（筆者注：徐士範本西廂記を指す）。」として、徐士範の序文と卷頭部分の書影をあげている。
- ②⑰ 「救苦難觀世音」（弘治本3—4）と「太行山」（弘治本5—1）の釋義は、余瀟東本の釋義の本文と異なり、徐士範本の釋義にはない。
- ②⑱ 高橋文治「崔府君をめぐる」（『田中謙二博士頌壽記念中國古典戲曲論集』（汲古書院 一九九二）所收）を參照。
- ②⑲ 注④前掲論文。
- ③① 注⑥前掲書二十八頁・五十四頁。
- ③② 劉修業「吳承恩著述考」（『古典小說戲曲叢考』作家出版社 一九五八 三十三頁）
- ③③ 「『西廂續集』卷一（注③①前掲書附錄 三九〇頁）。『中國古籍善本書目』集部下（上海古籍出版社 一九九八）一九九八頁に「花草粹編五卷 明吳承恩輯 明抄本 存三卷 三至五」とある。